

# 中世の堀の理解についての一考察

－発掘調査から見てきたもの－

すぎ うら あき ひろ  
杉浦 昭博

はじめに

- |                   |                                   |
|-------------------|-----------------------------------|
| 1 城ノ内遺跡発掘調査で出土した堀 | 3 城館以外の中世遺跡（宿など）の発掘調査で確認された堀（溝）   |
| 2 中世平地城館の堀について    | 4 城館以外の中世遺跡（墓域・聖域）の発掘調査で確認された堀（溝） |
- おわりに

本稿では、城ノ内遺跡発掘調査において確認された堀の性格を推定することを契機に、これまで調査された中世遺跡の堀（溝）について、遺跡の性格ごとに堀（溝）の規模・形態を整理し、考察する。特に中世平地城館に関わる堀については、城郭史学の成果をふまえ、4時期に区分できることを示し、それぞれの区分における堀の特徴を述べる。

## はじめに

平成30年から令和元年に行われた上三川町多功地内城ノ内遺跡発掘調査<sup>(1)</sup>において、鉤型に曲がる規模の大きな堀が発見された。この堀は、同遺跡付近に存在した中世城郭多功城の堀とされたが、「中世の大きな堀（溝）は城館の堀」という「イメージ」はどの程度確かなものかと思った筆者は、城ノ内遺跡の堀を契機に、これまで県内で出土した中世の堀（溝）について再考してみることとした。

因みに、遺跡発掘調査担当者の多くは「溝」を使用するが、本稿では多くの場合「堀」と表記している。この点、報告書の表現と相違している箇所が多々ある。そもそも溝か堀かを分ける決定的な定義はない。筆者は防御を主目的として掘削されたものは堀、用水や区画が第一義的であったものは用水路・区画溝と理解しているが、発掘調査では、遺構や遺物からは堀の機能を決定できない場合が多い。そこで本稿では先学<sup>(2)</sup>を参考に、規模として上幅が2～3m以上、深さが1.5m程度を越えるものを堀と呼ぶことにする。

なお、本稿をまとめるにあたり、各報告書の内容について記載した部分の中に筆者の誤記や誤認がある場合、その責は全て筆者にあることを付記する。

## 1 城ノ内遺跡発掘調査で出土した堀

まず、城ノ内遺跡で確認された堀の概要を示す。平成30年度城ノ内遺跡発掘調査（以下、1区とする。）では、調査区の南側を東西方向に直行する堀SD-002が確認された。堀の規模は上幅3.8～4.6m、底幅0.6m、深さ1.7～2.4m、箱葉研堀で傾斜角50～70°。2時期があり、新しい堀は深さが0.3～1m浅くなり、丸底になって傾斜角も30～40°と緩くなっていた。

SD-002は、1区の西隣、令和元年度発掘調査区（以下、2区とする。）の東端において、やや湾曲し、南に



図1 城ノ内遺跡調査1区、2区中世遺構図

方向を変える堀に繋がる。2区の調査ではこの堀をSD-311とした。SD-311の規模は、上幅4.1～6m、底幅0.5～1.2m、深さ1.2～2.3m、箱葉研堀。南北方向側で2時期を確認し、新しい堀は深さが半分、断面は緩傾斜になって法面西側途中に平場をもつ丸底になっていた。

SD-002（以下、東西方向の堀と記す）とSD-311の湾曲部から南側部分（以下、南北方向の堀と記す）は、堀の深さや箱葉研の形状が近似しており、堀の成立は同時期と思われる。堀を掘削した時期は特定できないが、東西方向の堀の使用下限は、覆土中出土したカワラケの器形などから16世紀末以降で、堀を埋めた後に近世墓が掘られる以前、即ち近世初頭と推測される。

東西方向の堀は、その北側に存在した多功城の縄張りの一部を形成し、城の南堀であることはほぼ間違いない。しかし、堀の西端は、本来囲むべき城郭の中核部を指向せずに多功宿の東際に止まって南に折れる。また、これに続く南北方向の堀の南端は西に折れ、多功宿の南辺を仕切るように延びていたことが推定された。

つまり、方向の異なる1本の堀は、多功城の南辺を区切り、多功宿の南東から南を囲むこと意図して掘られていたことになる。多功城は先に成立していた多功宿を意識して築かれた城であったから、宿との一体化を図る縄張りがなされたのであろう。

ただ、若干の疑問は残る。それは、堀が方向を変える部分が「不自然に」湾曲している点である。この点に関して調査担当者は、東西、南北方向の堀は同時期に掘削されたが、当初は繋がっていなかった可能性がある」と指摘している。筆者も同じ立場に立ってその根拠を探してみると、湾曲部に掘り返し痕がなく堀の上幅が約1m広がり、底幅が約2倍になっていること。東西方向の堀が南北方向の堀との交点から1m程西に掘り込んでいること。覆土中の遺物の出土状況が、東西方向の堀と南北方向の堀とでは明らかに異なっていることが見てきた。これらを勘案すれば、初め、この地点は通路などであったが、後に横矢を意識しつつ二つの堀がつけられたという可能性はあろう。

ともあれ、城ノ内遺跡の堀は、16世紀末まで使用された中世の平城の外堀であることは推測できた。それでは、「平地城館」の「外堀」という点に着目したとき、出土堀の規模・形状は中世の特定時期に比定できるのであろうか。この点について、先ず城郭研究の現状をまとめた上で、県内城館の発掘調査結果を再見したい。



図2 多功城縄張り想定図



写真1 城ノ内遺跡（堀部分）

## 2 中世平地城館の堀について

### (1) 城郭研究の視点から

東国では、13～14世紀まで（いわゆる鎌倉時代）の在地領主居館は、堀と土塁を四方に巡らせた方形館ではなかったと提唱されてから35年が経過<sup>(3)</sup>し、現在のところ共通認識となった感がある。このことに関しては、13世紀にも方形の「館」が存在していたことも報告されているが、これらは荘園領主（地頭）の屋敷で

あろうとの推論がある。当時の「方形館」は「役所」であったという理解である<sup>(4)</sup>。武士の住まいについては、「館」ではなく「屋敷」と表現する論考<sup>(5)</sup>は増えつつあり、この時代の在地領主は屋敷を堀で防禦するという発想がなく、屋敷近くに溝（もしくは小河川、水路）があってもそれは区画や水利を目的としたものだったという理解が大勢を占めている。屋敷を囲む土塁に至っては当時の絵画資料にも描かれない。

鎌倉時代末頃、文書には「城を構え」「要害に籠り」といった表現が散見されるようになる。屋敷を盾や柵で囲んだり、望楼を挙げたりする行為は戦闘行為とみなされ、これを「城を構えた」と言った<sup>(6)</sup>のであった。この意味において当時「城」は戦時における臨時施設であって、日常に生活する屋敷は「城」ではなかった。

南北朝争乱期からは「館」も文書史料に頻繁に登場するようになる。「屋敷」「館」「城」用語の使い分けは文書の書き手、状況、時代毎に異なっており、明確な使い分けはなさそうである。しかし、「屋敷」ではなく「館」とするとき、その差異は居住者の変化だけでなく、非常時の対応といった住まいの構造面の違いも感じさせる。この時代、都の足利將軍邸、管領邸に大きな堀や土塁は築かれない<sup>(7)</sup>が、地方の地頭屋敷は周囲を塁堀で囲むようになる。館の規模には館主の社会的な地位によって、都の將軍邸を規範に例えば1町四方というような企画性が存在したという考察<sup>(8)</sup>もある。しかし、屋敷は領国経営の拠点であって、戦時には要害の地に城を築いて立て籠もるという戦術が一般的であったと思われる。

東国においては15世紀中頃に生じた享徳の大乱を戦国時代の始めとする<sup>(9)</sup>。これ以降、公方・管領の抗争が国人領主を巻き込み、大規模な合戦が頻繁に起きた。戦場には陣場（臨時の城郭＝陣城）が築かれることもあった。領主の居館には外敵の侵入を防ぐために幅数mを越える堀や土塁が必要となり、外郭も設けるようになった。領主が普段からこうした備えのある館＝城に居住するようになったことで、「城」は日常的なものとなったと言える。

16世紀中頃の天文・永禄以降、下野においては上杉、武田、北条といった他国の大軍が侵入を繰り返す<sup>(10)</sup>ようになる。国人領主たちは一揆的結合をもってこれに対抗したり、強敵と目下の同盟を結び一時的に服従する道を選択<sup>(11)</sup>したりすると同時に、拠点となる城の拡張を迫られた。さらに、戦術としては鉄砲が使用されるようになると、城はこれにも対応する必要に迫られた。結果、特に外郭では幅10mを越える堀と土塁が不可欠となっていった。

以上のような理解に立ち、県内の中世城館調査結果について、特に堀に着目してみたい。なお、対象とする事例は、多功城同様の中世平地城館とする。

#### ① 宇都宮城<sup>(12)</sup>

宇都宮市中心部に所在する。北に釜川、東に田川が南流する宇都宮台地上に位置するが、要害地形ではない。中世においては宇都宮氏代々の居城であったが、遺構が近世宇都宮城と重複し、これまでの調査も一部に限られているため、中世城郭としての縄張りの復原は道半ばである。ただ、近世宇都宮城に「西館」「南館」曲輪があり、これは中世宇都宮城の名称の名残りにとらえることはできよう。

これまでの発掘調査で、近世宇都宮城清明台櫓土塁・堀下付近や近世本丸南虎口西側下付近で中世の堀跡が確認され、遺構は13世紀から16世紀に区分されている。13世紀の堀は直線に延び、上幅4.4～6.8m、底幅3.8～4.2m、深さ1.7mの箱堀。14世紀の堀は、上幅4～6m、底幅3m程度、深さ3～3.5mの箱堀。15世紀の堀は上幅3～5m、底幅0.2～1m、深さ2～2.5mの箱葉研堀。16世紀前半の堀は上幅4～8m、底幅0.3～1m、深さ2～3mの箱葉研堀。16世紀後半の堀は上幅8.5～13m、底幅4～8m、深さ2.7～4.5mの箱堀である。この内、15世紀から16世紀前半と推定される堀の形状・規模が城ノ内遺跡で確認された堀と似ている。



なお、注目されるのは、近世の本丸とは反対の方向に湾曲する16世紀の堀が数か所確認されていることである。中でも近世清明台櫓土塁・堀の下では北側の特定部分を囲むように掘られており、近世本丸南虎口西側付近では逆に南西の区画を囲む隅部分であるようにも見える。同市作成の推定復元図では、屈折して中心の曲輪を囲むような求心的な縄張りを想定しているが、中世宇都宮城は複数の方形郭の集合体、言わば群郭式の城郭であったとは考えられないだろうか。宇都宮氏の居館を中心にして、「西館」「南館」などが分立し、そこには芳賀氏を筆頭とする宿老中がそれぞれに屋敷（館）を構えていたのではないか。一部にはそれらを囲むように堀が巡っていたかもしれない。調査区に限られているため、断言はできないが、宇都宮氏が当主への権力集中をなし得なかった状況を踏まえれば、想定し得る景観であると思う。

## ② 壬生城<sup>(13)</sup>

壬生町の中心市街地に所在する平城である。宇都宮城同様、近世城郭として明治維新まで使用されており、中世城郭としての姿は明確でないが、報告書では近世本丸内で確認された鉤型で上幅9～12m、深さ約5.5mの堀を15世紀後半～16世紀後半の遺構と推定している。断面形は不明である。規模は近世の堀と比べても遜色がなく、城ノ内遺跡の堀と比べてはるかに大きい。堀の廃絶時期をもう少し絞れるかが今後気になるところである。

この堀のすぐ南に二の丸虎口の堀も確認されている。上幅7.5mの一回り小ぶりの堀で、こちらは16世紀中頃～後半とされる。断面形は箱堀（報告書の別箇所では薬研とも記す）という。水堀であるかどうかはわからない。中世壬生城は地域領主壬生氏の本拠であった。

## ③ 川連城<sup>(14)</sup>

栃木市旧大平町の永野川東岸に所在する。南流する永野川が形成した河岸段丘に築かれた平城で、本丸を中心に回字形の縄張りであったとされるが、遺構が少なく、これを確認することはできない。廃城は天正18年～慶長14年の間であろう。当城は皆川氏支城であった。

令和2年度の発掘調査により、外郭の堀跡が確認されている。上幅11.5m、底幅5.8m、深さ3mの箱堀で、途中に折があり、城内側に土塁を伴っていた痕跡がある。堀の南端は切岸となって永野川河川敷に落ちている。水流があった可能性があり、堀底には堀障子を思わせる畔が認められた。堀の下限は廃城時に近いと思われる。

川連城は、多功城と同時期の境目かつ拠点的な城郭であった。外堀は城ノ内遺跡出土の堀と比べれば、上幅が3倍近い。その理由は、掘削された時期差と流滞水の有無が考えられる。

## ④ 平出城<sup>(15)</sup>

宇都宮市東部鬼怒川西岸に所在する。東を南流する鬼怒川が形成した岡本段丘上に位置する平城であるが、特に要害地形ではない。良質な史料に恵まれないが、宇都宮氏の支城で、戦国期の城郭と思われる。中心部の民家屋号に「北城」「中城」「御城」などがあり、想定される外堀（惣堀）の範囲が広大であることから、群郭式の縄張りとは推測される。

平成21年度からの発掘調査により、城域の東側に折りのある南北方向の堀が確認された。報告書では鉤型に張り出す部分を東虎口と想定している。堀の上幅は3～4m、底幅0.4～0.8m、深さ2m。箱堀で、土塁が存在した可能性は一部に限られた。この堀の城内側には4棟の厩が存在したことが判明している。



平出城で確認された堀の規模は城ノ内遺跡で出土した堀に近く、戦国末期の城郭の外堀としては見劣りがする。この点に関連して、調査で確認した堀は、南に想定される「宿」を内部に取り込む惣堀であり、東の外堀はさらに東側にあった可能性を指摘する論考がある。もしそうであれば、出土した堀の規模性格は、城ノ内遺跡2区の堀と同じであったことになる。



写真2 平出城（堀断面）

#### ⑤ 荒井館<sup>(16)</sup>

大田原市町島地内、蛇尾川東岸に所在する。平成29（2017）年から行われた発掘調査において、居館西側の堀は直線的で、幅7～10m、深さが2m程度の箱堀。滞水の部分があったことが確認された。なお、調査当時、居館南側に高さ約3mの土塁が遺存しており、同様の土塁を西側にも想定すれば、実質上、堀幅は8～11m、深さは5mになる。城ノ内遺跡の堀と比べると堀幅が2倍以上あるのは、河川を取り込んだためであろう。郭内は60×64mを測る。



写真3 荒井館（主郭全景）

荒井館跡の南300mには水口館跡が存在する。水口館は大田原城を築く以前の大田原氏居館とされている方形館である。報告書では荒井館を水口館以前の領主居館ととらえ、複数の方形館で構成される群郭式の城館の存在を想定する。これは、15世紀末～16世紀前半の同族一揆阿保（大俵）党による領国支配の実態を考察した上での遺跡の解釈である。考古学と文献史学双方の研究成果が反映されている。

#### ⑥ 堀米城<sup>(17)</sup>

佐野市街地の北、犬伏宿の西に所在する。秋山川東岸に位置するが、特に要害地形ではない。地表面の城郭遺構は既に消滅し、縄張りを復元することはできないが、14世紀前半の領主堀籠氏の居城とされている。その根拠は千葉県鋸山日本寺所在の梵鐘刻銘元享元（1321）年「堀籠宮内左衛門尉源有元」である。

発掘調査で確認した直線的な堀は、狭い範囲ではあるが、遺構確認面で上幅3.2m、底幅0.3～0.4m、深さ1.6m。箱薬研堀で、二重堀の可能性があった。城域南東端の堀の一部と思われ、外郭の堀であることも想定された。報告書では、出土遺物から堀の時期を13世紀中～後半とする。

堀米城の存在時期が堀籠有元時代の14世紀前半であり、出土遺物でさらに遡るとすれば、時代背景から、堀米城は館もしくは屋敷となろう。出土堀を「外郭の堀」と仮定する際には、いわゆる回字形だけでなく、例えば「宿」のような空間が堀内に存在したか否かなど、多様なケースを想定したいところである。確認堀の規模は城ノ内遺跡出土堀に似ている。

#### ⑦ 薬師寺城<sup>(18)</sup>

下野市薬師寺に所在する。薬師寺城跡付近は館野前遺跡として昭和61年～平成元年に発掘調査され、この際、3本の堀が出土した。主郭の北郭北辺に続くとみられる直線的な堀は、上幅7～8m、深さ4.5mの薬研堀で掘り返しが認められた。主郭南辺に続くとみられる堀は上幅8m、底幅3m、深さ4mの箱堀で掘り返しは認められなかった。出土カワラケ編年は、13世紀初頭から15世紀後半までであることから、城の廃絶は15

世紀の終わりごろと推測されている。

しかし、当地は薬師寺氏・小山氏の支配領域から、結城氏の領国となって戦国期に至っており、天正6(1578)年には小田原北条氏の来攻に備えて結城晴朝が「薬師寺在陣」したことが書状<sup>(19)</sup>から知れる。この時、結城氏が薬師寺城に陣を置いたかどうかははっきりしないが、出土した堀の規模は戦国後期の遺構であったとしても見劣りはしない。薬師寺城については薬師寺氏衰退以降に視点を当てた研究が課題として残っており、堀もその中で再考する余地があるように思う。

#### ⑧ 長沼城<sup>(20)</sup>

真岡市内の鬼怒川東岸に所在する。小山一族長沼氏の居城とされる。長沼氏は鎌倉末期に長沼庄を離れるが、14世紀末に復帰し、15世紀中頃まで当地域を支配した。推定範囲図に合わせると北堀に相当する13～14世紀の堀は、上幅約6m、底幅2～4m強、深さ2m強の直線的な箱堀で流水の形跡があった。規模の大きなこの堀には、灌漑目的の水利機能があったと思われる。その内側にも上幅約4.5m、底幅約2.5m、深さ1.5m前後の湾曲する箱堀が確認され、報告書では15～16世紀前半の遺構の可能性を指摘している。この堀を城ノ内遺跡出土東西堀と比べると、規模は似ているが、断面は薬研堀と箱堀という違いがあり、長沼城堀の底幅は広い。ここにも流水の有無が関係していると思われる。



写真4 長沼城（15～16世紀堀断面）

なお、本報告書に掲載されている長沼城の推定範囲図は、地籍図や地割、小字をもとに作成された図であるという。歴史地理学的な立場から長沼城の姿を初めて再現した本図の価値は大きい。一方で、曲輪の配置や折ひずみの形状等、城郭の構造面からは不可解な点も少なくない。本図を貴重な素図として、多様な調査方法により修正を重ねていくことが長沼城の構造の解明につながるものと期待したい。

#### ⑨ 諏訪山遺跡<sup>(21)</sup>

下野市旧南河内町地内、自治医科大学南に所在する。天和元(1681)年「秋田藩下野領分絵図」<sup>(22)</sup>には「諏訪山」に方形四区画が描かれ、「堀あとのよふ二少見得候」と付す。この堀を含めた一帯は、諏訪山遺跡として昭和57年～平成2年に発掘調査され、I地区において上幅3.3～4.3m、底幅0.3～0.6m、深さ1.8mの薬研堀が確認された。報告書では「諏訪山城」の堀跡であると推定している。この堀の規模は城ノ内遺跡出土堀に近い。



写真5 諏訪山遺跡（全景）

確かに発掘調査で確認された堀の形状は上記絵図に似ており、絵図の方形四区画は城館跡を表しているようにも見える。しかしここに城館があったことを示す文書史料は管見の限りない。加えて、絵図では薬師寺城跡に回字形の堀跡を描き「古城」と記すのに比べ、この区画については、「諏訪山」とのみ記し、前記の付札を添えている。この違いを重視すれば、江戸初期、諏訪山の四区画は方形地割の集合体としか理解されていなかったことになる。わざわざ（やや強調して）四区画を書き入れた理由は、領分の境目にある特徴的な地形と入会地を明確に記す必要があったからとも考えられる。

報告書では「諏訪山城」の堀を、区画内の方形堅穴で出土したカワラケから16世紀代としている。と、す



れば、15世紀には廃絶に近い状態となったとされる薬師寺城より100年も後に廃された城館であるのに、地元の人々が城跡であると認識していなかったことになる。薬師寺城の廃絶時期が現状認識よりも下がるのか。それとも、そもそも諏訪山は城跡ではないのか。調査区域に限られてはいるが、堀内に特に城館に関連する遺構は見当たらないことも気になる。直線的で区画性が強く感じられる掘割であるが、諏訪山遺跡を16世紀の城跡とするためにはさらに史料を集積する必要があるだろう。

#### ⑩ 宿尻館<sup>(23)</sup>

小山市東部、西仁連川西岸に所在する。平成元年から発掘調査された田間東道北遺跡において、鉤型の堀が発見され、地割から一辺が125mの方形館を形成すると推測された。上幅3.2m、底幅0.6～0.8m、深さ1.5～1.8mの箱葉研堀。報告書では、土塁の存在を確認できなかったとする一方、付近には明治期の開墾まで土塁と堀が残っていたという記録があることも記し、出土堀を宿尻館に比定している。さらに、出土遺物から14世紀～15世紀の館という年代観を想定して「小山氏の領国支配と防衛にあたっていた」「館群のネットワーク」が存在したと推測する。



写真6 宿尻館（堀）

このような推測は、報告書作成当時、戦国城館について広く提唱された解釈であったが、今日ではさらに多様な視点に立った理解が迫られている。堀についても、条理地割、耕地開発、15世紀以降の変遷など、更に検討すべき課題が残されているように感じる。

#### ⑪ 中妻遺跡<sup>(24)</sup>

野木町佐川野地内に所在する。16区の発掘調査において、東西20m超、南北40m超を区画する、上幅2.1～4.7m、深さ約2m、L字に曲がる葉研堀が確認された。堀の内部からは3×9間の大型掘立柱建物跡や長軸7mを測る2軒の方形堅穴遺構が出土した。



写真7 中妻遺跡（堀断面）

遺物の特徴から鎌倉時代の遺構と推測されている。ただし、堀廃絶の時期は確定できていない。堀の規模は城ノ内遺跡の堀に似ている。

#### ⑫ 金山遺跡<sup>(25)</sup>

小山市南東部の東野田に所在する。昭和60年から行われた発掘調査で、南北約50mの区画（東西間は不明）を囲む堀の西辺が出土した。さらにこの区画の南側にも長さ約10m程の区画の存在が判明した。堀幅は3.4～4.7m、深さは0.8～1.8mの丸底堀。湧水が確認され、水堀の部分があったと思われた。報告書では戦国時代の集落もしくは館の堀と推測している。これ以上のことは明らかでないが、区画の規模から、集落というよりは屋敷または館の可能性が高いと思う。城ノ内遺跡の堀と比べると、若干浅い。



写真8 金山遺跡（堀断面）



⑬ 大関台・小屋原遺跡<sup>(26)</sup>

宇都宮市西部の西刑部地内に所在する。埋蔵文化財センターと宇都宮市の調査により江川左岸の平地に南北約80m、東西40～50mの範囲を区画する堀が確認された。さらにこの外側を巡る可能性のある堀も確認されており、二重の堀に囲まれるとすればその範囲は、東西190m、南北130m以上を測ることになる。内側の堀の上幅は2.6～3.4m、底幅0.4～0.5m、深さは1.3～1.5mの箱葉研堀であった。区画の南辺に土橋を確認したが、区画内には同時代の遺構・遺物がほとんどなく、その性格を判断するに至らなかった。



写真9 大関台遺跡（堀区画部分）

報告書では、文献史料を手掛かりに、16世紀前半の陣城の可能性を述べる。堀の規模は城ノ内遺跡の堀よりもやや小さい。

⑭ 森後遺跡<sup>(27)</sup>

さくら市鹿子畑に所在する。当地は古代において、駅家に関わる集落が存在したと推定される遺跡である。遺跡の西部で幅2.7～4.0m、深さ0.7～1.2m程の断面葉研形の区画溝が出土した。溝は鉤型の形状をしており、堀の西辺で土橋の存在を確認した。



写真10 森後遺跡

区画の性格を推測する遺構に乏しかったが、報告書では、館の存在を推測し、遺跡付近の城館と関連があった可能性にふれている。堀の規模は城ノ内遺跡よりもやや小さい。

⑮ 横倉館<sup>(28)</sup>

小山市東部、西仁連川西岸に所在する。平成2年から調査された横倉遺跡において、南北60m以上を区画（東西間は不明）する鉤型の溝が確認された。上幅1～1.8m、底幅0.5～0.6m、深さ0.5～0.7m、断面逆台形の溝と、上幅1.3m、深さ1.3m、断面葉研形の溝であった。



写真11 横倉館（堀）

報告書では、出土遺物から16世紀の年代を推定し、小山家臣横倉氏の居館であると想定して鷲城を守る防衛ラインの一端を担っていた可能性に触れている。しかし、溝の規模に関連して注目すべき見解は、「台地上に館が建ち、その北の低地に集落跡が存在する景観を描くこともできよう」としていることである。

⑯ 宿居館<sup>(29)</sup>

足利市西部の山下町に所在する。中世から近世、さらに明治以降まで使用された屋敷跡である。東西60m、南北70mの区画を囲む溝は、幅2m弱、深さは1m弱。宿居館は中世から近代までの複合遺跡であり、15世紀以降、屋敷を囲むという溝の役割は、時代が下っても続いていた。

⑰ 北の前遺跡<sup>(30)</sup>

宇都宮市上戸祭に所在する。発掘調査により、戦国時代から江戸時代の初め頃と思われる土豪（村落領主）の屋敷跡とみられる方形の周溝が出土した。

溝は東西36～38m、南北45～50mの範囲を隅丸方形に囲む。規模は上幅1～2m、底幅0.5～0.8m、深さ0.2～0.4m程度、断面は丸底形。溝で囲まれた内部には、2棟～3棟の掘立柱建物跡や柵や門跡の柱穴を確認した。屋敷の周りを囲む溝には水流の跡があった。

溝の規模は小さく、城ノ内遺跡の堀とは明らかに異なる。一方、土豪の屋敷の周溝としては一般的規模であると言える。

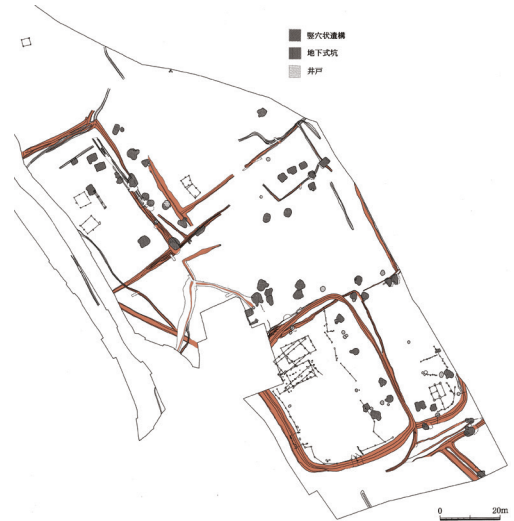


図3 北の前遺跡中世遺構平面図

⑱ 高島館<sup>(31)</sup>

上三川町北部、江川東岸に所在する。歴史も館の規模も不明だが、方形単郭を基本とする村落領主の居館と思われる。平成13～15年に実施された発掘調査において、館の南東隅部分の堀跡が確認された。堀は自然河川を利用したものと考えられ、上幅10～12m、底幅6～8m、深さは0.6～1m、断面は丸底形であった。館の存在時期が不明なため、時代の特徴として把握することはできないが、堀上幅が広い割りに深さが浅く、底幅も広い点は河川利用もしくは灌漑などの水利機能を持つ堀の特徴として挙げられよう。城ノ内遺跡の堀とは異なる形状であるのは、堀のもつ機能の違いによるものと考えられる。

⑲ 寺平遺跡<sup>(32)</sup>

市貝町塙の小貝川北岸に所在する。寺平遺跡で見つかった屋敷跡の溝は、一辺が60mの区画を区切る（報告書では確認した遺構から溝のラインを想定し、「囲む」と表記している）という。規模は幅2m、深さ0.5mで断面丸底形。報告書では14～15世紀前に築かれ、15世紀中頃に廃絶になった方形館の堀と想定している。

14世紀後半に益子氏を相続した市花輪勝直は、相続するまで市花輪居館に住んでいたが、市花輪館以前に住んでいた館がここであるという位置づけには整合性がある。もし築館が14世紀前半であったなら、住まいは方形館という概念でなく、在地領主の屋敷として理解すべきであろう。城ノ内遺跡の堀より規模は小さい。

⑳ 新町遺跡<sup>(33)</sup>

佐野市犬伏新町地内に所在する。発掘調査により、区画の角部と思われる溝を確認した。規模は幅0.8～1m、深さ0.45m、断面葉研形。遺跡は唐沢山城の南方に位置することから、報告書では城に関わる屋敷の溝の可能性を指摘している。中世の屋敷の環濠としては一般的ともいえる規模の溝である。

以上、平地に築かれた城館（屋敷）の堀の発掘事例を再見した。これらを先述の中世城郭史に当てはめ、目安として4つの区分に分けて類型化したい。

（Ⅰ）12世紀～14世紀初め（鎌倉時代）

①、⑥、⑧、⑪、⑭が該当する。⑭は時代が特定できないが、古代の駅家との関連を考慮し、中世前期と仮定する。この内、方形に近い区画溝であると推測されるのは、⑪と⑭である。2つの遺跡の溝幅は2～4m、深さ1～2mになる。区画される区域は、⑪が20m超×40m、⑭は2重区画で外側が70m超であった。溝が四周を囲んでいたとすれば、遺跡は地頭屋敷（荘園支配役所）であった可能性を追究したいところである。

また、①は直線的で、⑥と⑧は調査地が限られていたため、どのように区画をした堀（溝）であったかわからない。堀幅は4～7m、深さは1.6～2mの範囲である。共通点として、広い堀幅に比べて浅い傾向が認められ、水流水利との関連が想定される。

（Ⅱ）14世紀前半～15世紀中頃（南北朝争乱期～室町時代前半）

事例では、①、⑦、⑩、⑫、⑲がこの時期にあたる。ただ、⑦については、遺構の廃絶時期が16世紀に下る可能性を指摘したい。方形に近い区画堀であると推定されるのは、⑩、⑫、⑲である。これらの堀（溝）幅は2～3.5m、深さは0.5～1.8mの範囲に収まる。想定区画範囲は、⑩が125m四方、⑫が50m程度、⑲が60m四方であった。いずれも一部が確認されたに過ぎないが、方向性から方形区画を囲っていた堀（溝）と思われる。堀（溝）の規模はあまり大きくはない。

①は区画性も感じられるが、断片的でよくわからない。堀幅3～6m、深さは2～3.5m。⑦は直線的で区画性の確認はできない。堀幅は7～8m、深さ4～4.5m。2例の堀は前代に比べて規模が大きい。

（Ⅲ）15世紀中頃～16世紀中頃（享徳の乱～天文頃）

県内事例では、①、⑤、⑧、⑨、⑬、⑮がこの時期にあたりとされる。この全てが方形に近い区画堀と想定される。堀（溝）の規模は3つに大別される。①、⑤が最も規模が大きく、堀幅4～10m、深さ2～3m、次いで⑧、⑨、⑬が堀幅3～4.5m、深さ2m未満、⑮は、溝幅1～1.8m、深さ0.5～1.3mであった。①は下野最大の国人領主宇都宮氏の居城中心部の堀であり、⑤は河川を引き入れた堀であること、⑮の性格や時期が特定できないことを勘案すれば、この時期の城館の堀（空堀）としては、幅4m前後で深さ2m程度が一般的であったと推測できよう。堀に囲まれた区画は、⑤が約60m四方、⑨が一辺70m程度の区画4つの集合体、⑬が80m×40～50m、⑮が一辺60m以上（他辺の長さは不明）であった。区画（主郭）の広さが50～70m四方程度で、複郭もしくは二重区画プランが一般的であったことが推測される。

（Ⅳ）16世紀中頃～16世紀末（天文～慶長初年）

県内事例では、①、②、③、④、⑳である。①、②、③については、堀幅が10mを越え、深さも3m以上になる。④は前代（Ⅲ）の規模に近いが、これは堀の掘削が16世紀中頃以前であったが、16世紀末まで使用されたからであろう。このようなケースは、多くの城館で見られたに違いない。㉑は拠点城郭に付属する屋敷の区画溝の例である。

ただし、以上の理解は、対象となる城館が持っていた機能を踏まえなければならない。中世の城には様々な築城主体、政治的・軍事的役割があった<sup>(34)</sup>からである。具体的には、その城館が国人領主に従属してその上級家臣となった在地領主の本拠であったか、領主が築き、城番を置いた臨時性の強い境目の城であったか、



それとも村落領主（土豪）の屋敷であったのかを見極めることである。加えて、このような城館の役割は時期によって変化、複合する場合もあるから、良質な文献史料によって、当該地域の領国支配の推移をつかむことが不可欠となる。堀の機能としては、水堀である場合、水利目的を帯びる<sup>(35)</sup> ならば、水量を考慮して一定規模の広さが必要となったろうし、少量の水しかない狭い堀でも、用水支配のシンボルとして、あるいは村同士の紛争に際しては、十分にその役割を果たせたであろうと考えることもできる。

先の事例の⑯、⑰、⑱はこのような狭い堀（溝）を巡らせた村落領主（土豪）の館の例である。これらは堀（溝）によって囲まれた内郭が40～70mである点で共通しており、近世以降現在に至るまで子孫の居宅として使用し続けられている例もある。従って確認した堀（溝）が中世遺構かどうか、判断は一層慎重にならざるを得ない。

以上の前提に立ち、再び城ノ内遺跡出土の堀の変遷を想定したい。

多功城は、宇都宮氏家臣として多功宿を支配する在地領主多功氏の城として13世紀ごろに成立し、15世紀初頭～中頃にかけて多功城と多功宿を囲む堀（城ノ内遺跡出土堀）が整備された。

その後16世紀後半になると、上杉氏、北条氏など他国衆の大軍が宇都宮領内に侵攻するようになり、宇都宮氏の主要な拠点城郭であった多功城も他国衆の攻撃を受ける対象となった。さらに鉄砲が多用されるような合戦の様相が変化により、従来の外堀（城ノ内遺跡出土堀）が役不足となった多功城は、南に城域を拡張し、より規模の大きな堀を備えた城郭となった。令和3年度城ノ内遺跡発掘調査によって法面の一部が確認された堀跡は、新たに設定された多功城惣堀の一部であろう。開析谷を利用したこの堀の幅は15mほどになる。

城域の拡張後も元の外堀（発掘調査出土堀）は曲輪間を区切る内堀の一つとして使用されたが、16世紀最末、宇都宮氏家臣として多功を支配してきた多功氏が所領を失って多功城は廃城<sup>(36)</sup> となった。廃城に伴い、堀の多くは埋められる。やがて、江戸期に入ると、かつて堀があった周辺には墓が掘られ、墓域が形成されていった。

### 3 城館以外の中世遺跡（宿など）の発掘調査で確認された（堀）溝

ここでは、城ノ内遺跡2区南北方向の堀に宿を囲む役割を想定したことに関連して、宿を区画する溝・堀その類例を発掘事例から比較検討してみたい。

#### （1）下古館遺跡<sup>(37)</sup>

下野市旧南河内町地内、自治医科大学南に所在する。昭和56年～平成2年にわたって実施された発掘調査により、東西176m、南北470mの範囲を方形に囲む堀を確認した。堀の規模は上幅平均4.7m、底幅平均0.45m、深さ平均2m。南東の区画を囲む堀で上幅平均3.8m、底幅平均0.3m、深さ平均1.7m。共に箱葉研堀。堀の計測値・形状は城ノ内遺跡出土堀に近い。

報告書の「土塁が存在しないこと、堀の防御機能が充分でないなどの状況」、田代著書の「城館の堀に比べて規模が小さく、土塁の痕跡も認められない。本格的な防御施設とは言い難いが、単なるランドマークの区画溝としては立派すぎる」という指摘については、当報告書発表当時一般的であった戦国城郭についての固定化されたイメージが感じられ、にわかに賛同できない。しかし、発掘調



写真12 下古館遺跡（北辺の区画堀）

査の結果を総合的に勘案すれば、下古館遺跡は城館跡と理解すべき遺跡ではなく、従って確認された堀も城館に伴うものではないことは明白であろう。

堀に囲まれた部分については、中世の宿や市とする考察がある。報告書では、出土遺物から遺跡の成立を13世紀中葉、衰退を15世紀初頭とする。



写真13 下古館遺跡（聖域の区画堀）

## （2）日光道西遺跡<sup>(38)</sup>

小山市街地北部に所在する。出土遺物から、13世紀後期から14世紀と考えられる上幅7m、底幅3.2m、深さ2mの箱堀を確認し、東西150m以上、南北500m以上の区画を囲むと想定された。報告書では、この堀について、戦国小山城「木沢口」の前身であり、区画は奥大道と深く関わる。下古館と同じように宿を区画する堀と推測している。また、同じ時期に聖域を囲んでいたと想定された堀は、上幅3m、底幅0.6m、深さ0.7～1.5mの箱葉研堀であった。下古館と同様、遺跡に関わる豪族として、小山氏との関連が考えられている。宿を区画すると推定された堀は、城ノ内遺跡南北堀の2倍の幅がある。

## （3）下陰遺跡<sup>(39)</sup>

真岡市八木岡地内に所在する。発掘調査により複数の区画溝（堀）が確認された。報告書ではこれらの区画溝を、八木岡城の一部、館、市（津）の遺構であろうと推測している。館と推測された区画溝は上幅2.3～3.7m、底幅約0.5m、深さ約0.8～0.9mの箱葉研形。市（津）とされた区画の溝は上幅1.9～3.6m、底幅1.6～2m、深さ約0.6～0.9mで断面は葉研形から丸底まで様々である。八木岡城の外郭とされた区画溝は上幅約2.3m、底幅約0.6m、深さ約0.9mの箱葉研形である。なお溝の中には灌漑用水の流路としても使用されたものがあつたと述べられている。



写真14 下陰遺跡  
（館とされた区画溝）

報告書では、溝以外の出土遺構・遺物から総合的に判断して、遺跡の時期を15世紀～17世紀初頭とし、城、館、市（津）の存在を推定している。確かに「市場」「堀内」「東館」などの小字が付近にみられることは、遺跡の性格を推定する手掛かりとなり得る。しかし、あくまで溝だけに注目すると、そのような区画ごとの特徴が明確に表れているようには思えない。どの区画も、溝の幅は広くて2～3.5m程度、深さ1m以下という点で共通している。深さは城ノ内遺跡の堀の半分程度に過ぎない。



写真15 下陰遺跡  
（八木岡城の一部とされた区画溝）

語句から派生するニュアンスの違いと言えなくもないが、15世紀～17世紀に限定すれば、「館」の溝は「屋敷」の周溝（堀）とするのが妥当であろう。他の溝の多くは農業経営に係る灌漑目的の溝のように見える。八木岡城外郭の（曲輪や馬出の）溝という想定は、妥当であろうか。当該時期において防御機能が発揮できる規模で



あったとは思えない。加えて、八木岡城に関しては、延元四（1339）年、北朝方の拠点として南朝方に攻め落とされたという史実<sup>(40)</sup>がある。当時、下陰遺跡一带にはどのような景観が展開していたのだろうか。この時、八木岡城はなぜ北朝方の拠点となり得たのであろうか。下陰遺跡にはなお多くの謎が残されているように思う。



写真16 下陰遺跡  
(遺跡の背景に八木岡城跡)

#### (4) 城南3丁目遺跡<sup>(41)</sup>

宇都宮市南部に所在する。12世紀後半～13世紀前半にかけての遺構として、長さ75m以上の東西方向の溝（上幅1.5～2m、底幅0.6～0.9m、深さ1.2m。ただし、往時の地表面から+0.5mの可能性があるという。断面は逆台形。）と、南北25m以上で東西42m以上の鉤型の溝（上幅0.9～1.7m、底幅0.3m、深さ0.75m、断面は逆台形。）が出土した。報告書では、方形居館の遺構と推定しつつ、その成立時期と「道」との関係性において下古館遺跡との共通点を指摘している。

#### (5) 上芝遺跡<sup>(42)</sup>

旧国分寺町柴に所在する。遺跡の東半部において、東西60m以上、南北102mの区画を囲む堀が確認された。上幅は1.6～2.5m、底幅0.3～0.7m、深さ1.8～2.7mの箱葉研堀。出土遺物は13世紀から16世紀に渡るが、遺構に伴うものはほとんどなかったという。区画内には地下式坑14、井戸9、土坑350などがあり、堀はこれらを囲んでいたことになるが、当初予想された墓域説について、報告書では、土壌分析の結果から否定的である。ただ、100mを越える区画の規模から、単独の館を囲む堀の可能性も低いように感じる。条理地割との関連はないだろうか。



写真17 上芝遺跡 (区画堀)

#### (6) 清六Ⅲ遺跡<sup>(43)</sup>

野木町内思川東岸台地に所在する。低地に張り出した台地上に位置するが、東から見れば平坦な地続きである。遺跡では、中世の遺構の中に、調査区全体を4つに区画する溝が出土した。規模は幅広い区画溝で上幅2～2.5m、深さ0.1～0.3m、狭い溝で上幅0.2～0.4m、深さ0.3～0.5m。断面形はいずれも皿状であった。

遺跡は谷を挟んで南側に存在した野木城と関わる室町時代の町場の跡と推定された。北西区画では規模の大きな掘立柱建物と井戸、南西区画ではやや小さな掘立柱建物や井戸、地下式坑（地下室）、中央区画では多くの小規模な掘立柱建物、井戸、地下式坑（地下室）などが出土し、北西の区画と間には道の跡も確認した。

清六Ⅲ遺跡の区画溝は、宿全体と宿外を区切る溝ではなく、宿内の一定区域を区切る（宿割）溝である。同じ性格の場所において、この溝の規模が標準となり得るか、今後、事例の集積が求められる。



写真18 清六Ⅲ遺跡 (溝)

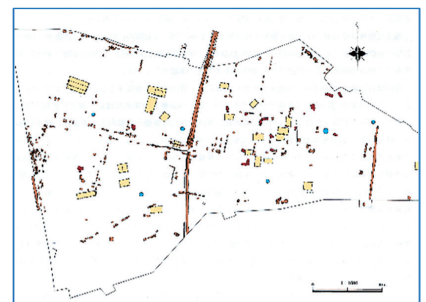


図4 清六Ⅲ遺跡 (中世遺構)



(7) 青龍淵遺跡<sup>(44)</sup>

鹿沼市南部の黒川西岸に所在する。報告書では、中世を4時期に分け、溝によって区画された地域の変遷を推論している。1段階は区画が出現した13世紀後半で、上幅5.6m～7.9m、底幅0.2～0.8m、深さ2.6m～3.1mの箱葉研堀が東西方向に伸び、東寄りに堀を貫く南北方向の道路がある。付近の一部が墓域であった可能性があるとする。2段階は14世紀後半で、この堀がなくなり、この南側に上幅2.7～4.1m、底幅0.3～0.6m、深さ1.2m～1.9mの鉤型の箱葉研堀が掘られる。3段階は15世紀後半で、道路が改修された時期、4段階は16世紀で、区画内の一部が墓地となった時期とする。また、遺跡周辺の道路や地割から推測し、下古館遺跡との類似点を掲げて、宗教的な色彩を帯び、河川交通と関連して成立した遺跡であると評価している。



写真19 青龍淵遺跡  
(東西方向の堀)

13世紀後半にこのような大きな堀を掘った理由は何か。遺跡を貫く南北道路の性格や黒川水運の実態など、周辺の中世の景観について、文献・フィールドワークからもアプローチが必要な遺跡である。

(8) 西根2遺跡<sup>(45)</sup>

栃木市旧岩舟町内に所在する。幅0.7～0.9m、深さ0.2～0.3mの溝は中世から近世にかけて存在したと考えられる集落を区画しており、3～4つの区画内には数軒の掘立柱建物と井戸が造られていて、なかには漆に関わる工房もあった。遺跡は16世紀代を中心とすると考えられ、3時期の変遷が想定されている。集落(宿)内の区画溝としての性格は、清六Ⅲ遺跡に近いとみなすことができる。溝の形状も近似する。



写真20 西根2遺跡

(9) 星ノ宮遺跡<sup>(46)</sup>

市貝町文谷地内に所在する。報告書によれば、中近世の遺構は6時期に分けられる。14世紀後半～15世紀前半は、掘立柱建物と井戸で構成され、さらに古い時期の古瀬戸入子が出土している。15世紀中葉～後葉には区画溝が掘られ、建て替えの認められる掘立柱建物跡などからの出土遺物が豊富であった。16世紀後半は集落の拡大期で、区画溝を伴う大型の建物が整然と並んでいた。16世紀末～17世紀初頭にかけては、建物跡が最も多い時期で区画溝も掘られていた。掘立建物群を区画する溝の上幅は1.6m、底幅0.6～1m、深さは0.2～0.6m、断面逆台形であった。溝の全体像は不明であるが、複数の溝がそれぞれに個の屋敷を区画していた可能性もある。

今日でも人々は、屋敷を囲う塀や自分の土地と他人の土地とを区切る工作物などを造る。それは、自分が所有する土地を目に見える形で他と分けたいという意識が存在するからである。中世前期には、散村が多かった東国でも、交通の要所には市・泊・津そして町場(宿)が形成されるようになった。しかし、自力救済が基本の中世では、個人だけで所有物を守ろうとすることには限界があり、住民は同族や地域集団として結束して共有地を他と区切り、権利と治安を保持する必要があった。ここに宿を囲む堀を掘るという行為の目的があったと理解することができる。

宿を区画する堀は13世紀から出現しており、在地領主屋敷を囲む堀の出現以前である点は注目される。堀の幅は1m未満から8mに迫るものがあり、深さも0.3m程度から3mを測るものがあり、時代ごとに迫っても規模は様々である。それは、外部からの侵入を制限する外に、用排水の管理、住民の階層や職能など同集団を括るためなど堀を掘る目的も多様であったことと関係があるに違いない。

また、堀の機能が同じで、掘られた時代が近くても規模が異なる場合がある。(1) 下古館遺跡と(2) 日光道西遺跡を比較すると、深さ2m程度であることは共通するが、上幅が大きく異なっている。この相違は、水流を利用できたか否かが関わっていると考えられる。2つとも堀で区切る第一義は外敵(人だけとは限らない)の侵入阻止にあるから、空堀であれば堀底は葉研形にせざるを得ないが、仮に葉研形で上幅を7~8mにしようとするれば、目的を実現する法面の傾斜角度を考慮すると、堀底を4~5mも掘り込まなければならないことになる。しかし、もし水流が得られれば、堀底は幅広でもよく、その分堀上幅は広げることができる。(2)の場合は、深さ2mにも関わらず、堀幅を7m確保することができている。

以上、城館以外(宿など)の堀の出土例を参考にしても、城ノ内遺跡2区の南北方向堀は、宿際に沿うように掘られている様子と断面の形状・規模から、下古館遺跡や日光道西遺跡同様に宿を囲む堀であったと想定することが可能であることを指摘したい。多功宿の西側の堀の存在については未調査であるが、宿西端には「二の谷」という小字があり、堀でないにしても谷地形が存在していたことを示唆する。因みに「二ノ谷」から北上すると、開析谷を隔てて字「天神」の台地に至るが、ここに所在した多功遺跡の発掘調査<sup>(47)</sup>では、南北方向の堀が確認されており、その規模は上幅5m、下幅0.5~0.7m、深さ1.7~2mであって、城ノ内遺跡の堀と似ている。仮に多功遺跡の堀と城ノ内遺跡の東西堀が開析谷を挟んで天神、本宿を囲む目的で掘られたとすると、堀が囲んだ範囲は南北約320m、東西約40mということになる。

#### 4 城館以外の中世遺跡(墓域・聖域)の発掘調査で確認された(堀)溝

城ノ内遺跡1区では、東西堀の北側(多功城内側)に中世墓墳が散在する様子が確認<sup>(48)</sup>されている。堀と墓域との関連を考察する上で、墓域を区画する溝(堀)についても類例を調べ、特徴を整理して比較することが必要である。

##### (1) 市ノ塚遺跡<sup>(49)</sup>

真岡市(旧二宮町)高田地内に所在する。発掘調査によって、一辺が27m~35mの方形の区画を囲んだ溝が確認された。上幅は約1.4m~3.7m、底面は丸底で、深さは0.2~0.5m。溝で囲まれた区画の内部には、生活を感じさせる遺構や遺物が少なく、掘立柱建物一棟と方形竪穴(地下室)群、長方形土坑が多く出土した。方形区画は14世紀後半から15世紀前半(南北朝時代から戦国時代の前頃)の墓域と推定されている。墓域を溝で囲むことで、聖と俗との境を明確にした例である。



写真21 市ノ塚遺跡(周溝)

また、市ノ塚遺跡の第二次調査では、町境に掘られたと考えられる堀が確認された。幅が3~4.8m、底幅は1.3~1.6mで凹凸があり、一部には溜水の跡があった。深さは1.6m程度。発掘された部分は限られたが、報告書では、専修寺を中心とする宿を囲む堀の一部と推定している。

(2) 野高谷薬師堂遺跡<sup>(50)</sup>

宇都宮市野高谷町地内に所在する。中・近世の大規模墓地遺跡であり、15世紀後半～16世紀に墓域が形成されたと思われる。また、区画内には一定程度の生活の場が存在したことも想定されている。溝（堀）が囲むのは、おおよそ東西134～187m、南北125～230mの範囲である。区画溝（堀）は幾筋も確認されたが、主な溝（堀）3条の規模は、それぞれ上幅1.8m～2.4m、深さ1～1.2m（いずれも多く計測された部分の数値）。上幅2.2～3.3m、深さ1.3～1.5m。上幅0.7～1.5m、深さ0.2～1mであった。

(3) 横倉宮ノ内遺跡<sup>(51)</sup>

小山市横倉地内に所在する。15世紀中葉～後半には上幅1.2～1.4m、深さ0.5mで長さが5m～7mの数本の溝で仕切られた区画内に比較的規模の大きな屋敷群があり、溝は神社にも関連したと推定されている。

15世紀末～16世紀にかけては土壙群が大規模な共同墓地を形成し、これを上幅0.3～2m、深さ0.1～0.6mの溝が方形に囲っていたことが判明した。

大規模共同墓地は17世紀に終焉を迎えるが、この時期も、墓地を方形に区画する溝があった。



写真22 横倉宮ノ内遺跡

(4) エグロ遺跡<sup>(52)</sup>

佐野市越名町地内に所在する。中世の墓域を区画する大小多数の溝が確認された。溝は上幅が0.4～1m程度が多く、深さは0.1～0.5mで深くても1m程度であった。



写真23 エグロ遺跡（区画溝）

(5) 黒袴台遺跡<sup>(53)</sup>

佐野市黒袴町・西浦町地内に所在する。中世の墓域等に係ると推定される溝が確認されている。墓域を区画する溝は、平均1.1m、底幅平均0.4m、深さ平均0.3mであった。

(6) 立野遺跡<sup>(54)</sup>

宇都宮市東谷町・中島町地内に所在する。調査5区で確認された方形区画は一辺が72×44m以上と47×45m以上の2つあり、中世の墓域等に係ると推定されている。墓域を囲む溝は、上幅0.6～3m程度、深さ0.5～0.7m、断面形は一定でなかった。

(7) 南飯田前畑遺跡<sup>(55)</sup>

小山市南飯田地内に所在する。調査6区と7区において3～4区画の方形区画溝が確認された。区画は一辺が20m程から60m弱まで様々である。6区の区画溝は、上幅2.5～3m、深さ0.5～1m。7区の溝は大きなもので上幅2～3m、深さ1m前後。小さなもので上幅1～2m、深さ0.6～0.8m前後。断面は逆台形から丸底まであった。

これらは区画内の遺構と遺物から墓域を囲む溝とされている。



(8) 佐川野上遺跡<sup>(56)</sup>

小山市南飯田地内に所在する。調査2区において、方形に区画する溝(堀)を複数確認した。溝(堀)は大きなもので上幅0.8～3m、深さ1～1.5m。小さなもので上幅0.2～1m前後であった。区画内の遺構と遺物から、区画溝は墓域を囲む溝とされている。



写真24 佐川野上遺跡区画溝

(9) 鹿沼流通業務団地内遺跡<sup>(57)</sup>

鹿沼市上石川地内に所在する。一辺50m四方の方形区画溝(堀)は幅2～3.5m、深さ1～1.3mで、この区画の西、南、南東にもそれぞれ方形区画が確認された。西の区画は東西55m、南北70mで、溝は幅0.8m、深さ0.25～0.6m。南の区画は方25mあり、傾斜地のために溝(堀)は幅2～2.7m、深さ0.85～1mとやや深い。南東の区画は東西45m、南北20mで、ここも傾斜地のため、溝(堀)幅は2.5m、深さ1.5mとやや規模が大き。報告書では、これらの区画は出土遺物から15世紀後半～16世紀の墓域とし、遺跡の北方500～600mに所在した石川館(城)<sup>(58)</sup>との関係に言及している。



写真25 鹿沼流通業務団地内遺跡

(10) 野沢遺跡<sup>(59)</sup>

宇都宮市野沢町地内に所在する。15～16世紀にかけて成立し、近世まで営まれ続けた墓域を囲む溝が確認されている。報告書では、建物等の痕跡がなかったものの、館・城・寺院廃絶後に墓地が営まれた可能性に言及している。溝によって区画されたのは東西41～43m、45～53m以上の区域であった。溝幅は0.4～最大2.5m、深さ0.1～最深1.1mと一定でない。



写真26 野沢遺跡

(11) 成願寺遺跡<sup>(60)</sup>

宇都宮市西刑部地内に所在する。発掘調査によって、現在も当地に所在する医王山薬師院成願寺<sup>(61)</sup>の北辺を形成した区域溝と思われる直線的な溝が確認された。上幅は2～2.5m、深さは1～1.2mであった。確認できたのは北辺のみで、他方向を区画する溝の有無や規模、時期の特定には至らなかったが、寺伝などから鎌倉期以降の遺構と思われた。

(12) 樺崎寺<sup>(62)</sup>

足利市樺崎町に所在する。足利氏の氏寺・廟所跡で、鎌倉時代に創建され、室町時代には鎌倉公方の厚い庇護を受けた。寺は15世紀中ごろ以降から徐々に衰退し、明治期に廃寺となった。

寺跡は平成13年に国の史跡に指定されており、この前後から開始された発掘調査では、寺域内で複数の区画溝(堀)が発見されている。この内、導水路を除く中世の区画溝(堀)の規模は以下の通りであった。寺

域北辺の大溝（堀）は樺崎川の氾濫防止も兼ねて掘られたと推測され、上幅は5 m以上で深さ1.5m、断面逆台形。主要伽藍と僧房域を区画する溝は上幅0.6～0.8m、深さ0.2～0.3mで断面逆台形。辻部屋内の区画溝は上幅約1 m、深さ約0.3m、断面逆台形。西部屋内の区画溝は上幅1.2～3 m以上、深さ0.2～0.3m、断面逆台形。樺崎寺の区画溝は上幅、底幅共に広く、浅いことが特徴である。

聖域と俗界を溝（堀）で区切る場合、日常生活の場合は俗なる場所（現世）であるから、溝（堀）で区画されるのは聖なる場所（来世）ということになる。溝（堀）で区切るのは、鎮魂や死者を崇拝する気持ちだけでなく、死を恐れ、死が日常に入り込むことを忌み嫌う気持ちの表れでもあったろう。また、野犬などの侵入によって聖域が荒らされることを防ぐ目的も考えられる。

そのような目的を想定すれば、必要とする区画溝・堀の規模は自ずから定まってくる。聖域の傾斜地形に左右される部分もあるが、区画溝には、幅が1 m未満の溝もあれば、2～3 m程度を測る溝も多いというように、堀幅に一貫性がないこと、深さは数十cmから1 m未満と浅い溝が多いこと、堀底形の成形が甘い傾向が認められることは当然であるとも言えよう。

## おわりに

遺跡発掘調査において中世の堀（溝）の出土例は数多い。言うまでもなく、堀を掘るには、人、金、時間が必要である。従って、意味もなく堀を掘ることはあり得ず、堀には必ずその存在意義があったはずである。加えて、堀（溝）は使用される期間中、メンテナンスが欠かせず、常に堀浚いが行われたと考えられる。中でも城館の堀や水利のための堀（溝）については、頻繁に堀浚いが行われたはずであり、堀の使用時期に直結する遺物が覆土中に残ることはまずない。

しかも発掘調査においては、範囲が限定されていることから、一定の区画を囲む堀なのか、直線的に仕切るだけの堀なのかすら判別できず、とりあえず出土した溝（堀）の長さや断面形「葉研形（V字形）」、「逆台形（底面が幅広）」などを事実記載するしかないことが多い。溝で区画された内側の遺構が解釈できなければ、漠然と「根きり溝」「区画溝」などと推測し、覆土の状態によって埋没の様子と流滞水の有無を、出土遺物によって溝（堀）の廃絶時期を想定するしかない。しかも、覆土から出土した最も新しい時代の遺物は、必ずしもその堀の使用最終時期を表すものとは限らないという調査の限界は、今後もそれほど変わり得ないだろう。

ただ、これまでは一定規模以上（本稿で筆者が堀とした程度の幅と深さ）の堀（溝）が発見された際、その溝が方形（鉤型）に曲がっている場合は猶更、安易に「城館の堀」などと想定する傾向はなかったであろうか。堀（溝）遺構の性格を推測する際、その前提として、文献史学、歴史地理学、フィールドワークなど多様な調査研究成果に敏感でありたいと改めて自戒する。

本稿で述べたかったことを改めて整理し、さらに今後追究したい課題を加えてまとめに代えたい。

- 1 中世平地城館の堀（溝）には、その城館の使用時期と機能により特徴がみられる。特に、12～14世紀代の堀（溝）を屋敷・館の堀（溝）と想定する際は、「堀と土塁に囲まれた方形館」というかつてのイメージを払拭した上で、遺構の性格を考察することが求められる。加えてこの時期の遺構に「城」用語を用いる場合は、その明確な根拠が示されなければならない。
- 2 下野国内では「堀で囲まれた宿」の景観が成立するのは13世紀頃と想定されている。そうした宿は、どこにどのように存在し、15世紀以降どう展開していくのか。今後事例を集積し、在地領主の一円的な支配の確立（宿・道の支配、居城の拡大）との関連の中で考察してみたい。

3 屋敷（居館）、用水、寺社、道をセットとする視点（本拠の形成）<sup>(63)</sup> に立ったとき、これまで調査された区画溝（堀）を伴う遺跡はどのように再評価されていくのか。新たな位置づけが生まれる可能性を感じている。

本稿をなすにあたり、当センター副所長篠原祐一氏からご意見を賜りました。末筆ながら御礼申し上げます。

#### 〔註 引用、参考文献〕

<sup>(1)</sup> 城ノ内遺跡発掘調査は、2018年度、2019年度、2021年度に行われた。2023年度は整理作業を行っている。

<sup>(2)</sup> 馬瀬智光「洛外における堀の変遷」京都市文化財保護課研究紀要 2018年。論考において馬瀬氏は、平安後期以降の洛外で検出された遺構例を抽出し、京都市内においては、幅3m、深さ1m以上のものが堀と認識されることが多いとしている。このことを参考に、筆者は溝と堀の境を、一般成人の身長を目安として堀幅はその2倍、深さは身長並みと定義した。

なお、堀の断面形についても、報告書毎に表現は様々であるが、本稿では、歩行ができない程度の底幅の空堀を葉研堀、葉研形だが堀底の歩行が可能と思われる幅を有する空堀を箱葉研堀、堀底が広く平坦な空堀を箱堀、傾斜が緩く堀底が平面でない空堀を丸底堀と表現した。この表記に関しても各報告書記載の表現と相違する。溝の断面形についても、報告書の表現を尊重しつつ、筆者の考える基準に照らして一部の表現を変えている。

<sup>(3)</sup> 橋口定志「中世居館の再検討」東京考古5 1987年を初出とする。考古学の成果から、それまでの城館理解が修正された意味は大きい。

<sup>(4)</sup> 近畿地方では12世紀後半には水堀を巡らせた居館が出現するという。中井均「中世の居館・寺そして村落」『中世の城と考古学』新人物往来社1991年 同書が著された当時の認識において中井氏は、東国と西国の違いと捉えている。また、土塁についても西国の事例として12世紀末には存在したと推測する。

茨城県つくば市島名前野東遺跡は13世紀後葉から14世紀前葉（南北朝初期）の一辺約100m四方の方形館で、四周を堀が囲む。堀幅は3.6～5m、深さ1.2～1.5mである。この遺跡について、齋藤慎一氏は、同遺跡の他にも数例をあげた上で、「鎌倉時代から南北朝時代にかけての方形館とは、都市などに居住する領主が遠隔地にある所領を支配するため、いわば役所のような機関」「荘園内の政所に近似する」「方形単郭を意識した遺跡＝方形館がこの時期に存在した」と述べている。齋藤慎一・向井一雄『日本城郭史』吉川弘文館 2016年

「役所のような機関」はなぜ四周に堀を巡らせる必要があったのか、そのような「役所」は在地領主屋敷と比較してどれくらい分布していたのか、そもそも役所のような地頭屋敷や軍事性の低い土豪屋敷は「城館」概念の中にどう位置付けられていくのかなど、今後の論議が注目される。

<sup>(5)</sup> 一例として田中大喜『中世武士団―地域に生きた武家の領主―』国立歴史民俗博物館企画展示図録 2022年 III章36頁

<sup>(6)</sup> 中澤克昭『中世の武力と城郭』吉川弘文館 1999年

<sup>(7)</sup> 「洛中洛外図」歴博甲本 大永3～4（1523～24）年頃成立 国立歴史博物館蔵

<sup>(8)</sup> 中井均「中世城館の発生と展開」物質文化48 1987年 また、註（4）。

<sup>(9)</sup> 峰岸純夫「東国における十五世紀後半の内乱の意義―享徳の乱を中心に―」『中世の東国―地域と権力―』東京大学出版会 1989年

<sup>(10)</sup> 永禄元（1558）年からの長尾景虎による関東侵攻、元亀四（1573）年北条氏来寇で生じた多功原合戦など

<sup>(11)</sup> 北条氏に対抗した佐竹氏を盟主とする国人連合「東方之衆」や上杉輝虎に対して離合を繰り返す佐野氏など地域領主の動向がその一例である。

<sup>(12)</sup> 『宇都宮城跡』―平成24年度・25年度調査― 宇都宮市埋蔵文化財調査報告書第90集 宇都宮市教育委員会 2015年 今平利幸「掘り出された宇都宮氏の中世館・城郭」『中世宇都宮氏の世界』彩流社 2013年

<sup>(13)</sup> 『下野壬生城』壬生町埋蔵文化財調査報告書第15集 壬生町教育委員会 2000年



- (14) 『川連城跡』日本窯業史研究所編 栃木市教育委員会 2021年
- (15) 『平出城跡』栃木県埋蔵文化財調査報告第397集 公益財団法人とちぎ未来づくり文化財団埋蔵文化財センター 2020年  
篠原祐一「平出城私考」『歴史と文化』30号 栃木県歴史文化研究会 2021年
- (16) 『荒井館跡 水口龍泉寺跡 船山遺跡』栃木県埋蔵文化財調査報告書第408集・大田原市埋蔵文化財調査報告第6集 栃木県教育委員会・大田原市教育委員会・公益財団法人とちぎ未来づくり財団 2022年
- (17) 『堀米城跡・堀米遺跡』栃木県埋蔵文化財調査報告第385集 公益財団法人とちぎ未来づくり文化財団埋蔵文化財センター 2017年
- (18) 『下野市内遺跡発掘調査報告書 三仏・向山・館野前遺跡・薬師寺城』下野市埋蔵文化財調査報告 第8集 下野市教育委員会 2010年
- (19) 「結城晴朝書状」『戦国遺文下野編第二巻』1206号文書 東京堂出版 2018年
- (20) 『長沼城跡』栃木県埋蔵文化財調査報告書第335集 財団法人とちぎ生涯学習文化財団 2011年
- (21) 『諏訪山・諏訪山北遺跡』栃木県埋蔵文化財調査報告第147集 財団法人栃木県文化振興事業団 1994年
- (22) 『南河内町史 史料編5 絵画』所収 南河内町 1990年
- (23) 『田間東道北遺跡』栃木県埋蔵文化財調査報告第149集 財団法人とちぎ生涯学習文化財団 1994年
- (24) 『南飯田前畑遺跡・中妻遺跡・佐川野上遺跡』栃木県埋蔵文化財調査報告第391集 財団法人とちぎ生涯学習文化財団 2019年
- (25) 『金山遺跡Ⅰ』栃木県埋蔵文化財調査報告第135集 財団法人とちぎ生涯学習文化財団 1993年
- (26) 『大関台遺跡』栃木県埋蔵文化財調査報告第251集 財団法人とちぎ生涯学習文化財団 2001年
- (27) 『森後遺跡Ⅱ』栃木県埋蔵文化財調査報告第328集 財団法人とちぎ生涯学習文化財団 2010年
- (28) 『横倉遺跡』栃木県埋蔵文化財調査報告第182集 財団法人とちぎ生涯学習文化財団 1995年
- (29) 『宿居館跡発掘調査報告書』足利市埋蔵文化財調査報告 第45集 足利市教育委員会 2001年
- (30) 『北の前遺跡』栃木県埋蔵文化財調査報告第252集 財団法人とちぎ生涯学習文化財団 2002年
- (31) 『高島遺跡群』栃木県埋蔵文化財調査報告第309集 財団法人とちぎ生涯学習文化財団 2008年
- (32) 『寺平遺跡発掘調査報告書Ⅱ』市貝町教育委員会 2016年
- (33) 『新町遺跡』佐野市文化財調査報告書 第25集 佐野市教育委員会 2009年
- (34) 萩原三雄「中世城館研究の課題と展望」『中世の城と考古学』新人物往来社 1991年
- (35) 佐野静代「平野部における中世居館と灌漑水利－在地領主と中世村落－」人文地理第51巻第4号 人文地理学会 1999年
- (36) 系図によれば、多功領主の祖となる宗朝が多功に館を構えたのは、宝治二(1248)年という。多功氏が所領を失うのは、主家宇都宮氏が改易となった慶長2(1597)年である。まもなく多功城も公収されて廃城となったと思われる。
- (37) 『下古館遺跡』栃木県埋蔵文化財調査報告第166集 財団法人栃木県文化振興事業団 1995年  
田代隆・鈴木泰浩「道・市・宿－下古館遺跡とは何か」『知られざる下野の中世』随想舎 2005年
- (38) 『日光道西遺跡Ⅲ』小山市文化財調査報告書第56集 小山市教育委員会 2002年  
『日光道西遺跡Ⅴ』小山市文化財調査報告書第95集 小山市教育委員会 2015年
- (39) 『下陰遺跡Ⅰ』栃木県埋蔵文化財調査報告第310集 財団法人とちぎ生涯学習文化財団 2006年  
『下陰遺跡Ⅱ』栃木県埋蔵文化財調査報告第330集 財団法人とちぎ生涯学習文化財団 2010年
- (40) 延元四年三月二十日付北畠親房御教書写「…矢木岡城被落候 城中輩惣領以下 不漏一人被誅畢…」栃木県史史料編中世三所収 1978年
- (41) 『城南3丁目遺跡』宇都宮市埋蔵文化財調査報告書第39集 宇都宮市教育委員会 1996年
- (42) 『上芝遺跡』栃木県埋蔵文化財調査報告第137集 財団法人栃木県文化振興事業団 1993年
- (43) 『清六Ⅲ遺跡』栃木県埋蔵文化財調査報告第228集 財団法人栃木県文化振興事業団 1999年
- (44) 『青龍淵遺跡』栃木県埋蔵文化財調査報告第317集 財団法人栃木県文化振興事業団 2009年
- (45) 『西根2遺跡』栃木県埋蔵文化財調査報告第320集 財団法人栃木県文化振興事業団 2009年
- (46) 『星ノ宮遺跡』栃木県埋蔵文化財調査報告第369集 財団法人栃木県文化振興事業団 2014年

- (47) 『多功遺跡Ⅱ』上三川町埋蔵文化財調査報告第11集 上三川町教育委員会 1993年  
『多功遺跡Ⅲ』上三川町埋蔵文化財調査報告第16集 上三川町教育委員会 1997年
- (48) 遺物から中世墓と判断された土壌は3基。他に中世の土坑と思われる遺構を43基確認し、この中には墓壇も含まれると思われた。なお、地下式坑も8基確認されたが、墓壇か貯蔵穴かの判断はできなかった。
- (49) 『市ノ塚遺跡Ⅰ』栃木県埋蔵文化財調査報告第303集 財団法人とちぎ生涯学習文化財団 2007年  
『市ノ塚遺跡Ⅱ』栃木県埋蔵文化財調査報告第373集 公益財団法人とちぎ未来づくり財団 2015年
- (50) 『野高谷薬師堂遺跡』栃木県埋蔵文化財調査報告第375集 公益財団法人とちぎ未来づくり財団 2015年
- (51) 『横倉宮ノ内遺跡』栃木県埋蔵文化財調査報告第161集 財団法人栃木県文化振興事業団 1995年
- (52) 『エグロ遺跡』栃木県埋蔵文化財調査報告第260集 財団法人とちぎ生涯学習文化財団 2001年
- (53) 『黒袴台遺跡』栃木県埋蔵文化財調査報告第261集 財団法人とちぎ生涯学習文化財団 2001年
- (54) 『立野遺跡』栃木県埋蔵文化財調査報告第290集 財団法人とちぎ生涯学習文化財団 2005年
- (55) 『南飯田前畑遺跡・中妻遺跡・佐川野上遺跡』栃木県埋蔵文化財調査報告第391集 財団法人とちぎ生涯学習文化財団 2019年
- (56) 『南飯田前畑遺跡・中妻遺跡・佐川野上遺跡』栃木県埋蔵文化財調査報告第391集 財団法人とちぎ生涯学習文化財団 2019年
- (57) 『鹿沼流通業務団地内遺跡』栃木県埋蔵文化財調査報告第121集 財団法人とちぎ生涯学習文化財団 1991年
- (58) 発掘調査は行われていないが、複郭の城郭で、宇都宮氏配下の石川氏の居館とされる。堀跡や土塁の一部が残存しており、現在も子孫が居住する。
- (59) 『野沢遺跡・野沢石塚遺跡』栃木県埋蔵文化財調査報告第271集 財団法人とちぎ生涯学習文化財団 2003年
- (60) 『成願寺遺跡』栃木県埋蔵文化財調査報告第239集 財団法人とちぎ生涯学習文化財団 2000年
- (61) 成願寺の創建は、寺伝によれば正治年間（1199～1200）である。同寺には足立藤九郎盛長に関わる伝承がある。
- (62) 『法界寺発掘調査概要』足利市埋蔵文化財調査報告第29集 1995年  
『史跡 樺崎寺跡（法界寺跡）発掘調査概要Ⅱ』足利市埋蔵文化財調査報告第57集 2008年
- (63) 齋藤慎一『中世東国の領域と城館』吉川弘文館 2002年 註（4）『日本城郭史』